

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

科学への強い「依存」と「不信」という矛盾した感情が、若い人々に広がる超能力や超科学へのあこがれに結びついていくようです。自分で決心しないで占い・お告げ・霊視・大言言などに頼り、物理的に不可能な空中浮揚や^{※1}トランスポーターションを信じたり、実体のない守護霊やオーラが存在するかのよう思う心理のことです。^①このような心理が「科学の時代」に広まっているのはどうしてなのか。現代科学を「超える」という幻想で、わからないことへの不安が取り除かれるかのような気分になり、同時に、神秘の世界に逃げ込むことにより、それ以上深く考えなくてもすむという「安心」感も得られるからではないかと思われまふ。

むろん、科学だけが原因ではなく、学歴が将来を決定し、会社や上役のいうことに^aフクジュウして生きねばならず、変化の可能性がなかなか見えにくい、現代という時代が背景にあります。歴史的に見ても、混とんとして将来のことがよく見えない時代になると、超能力を看板にした宗教が流行しました。現在も例外ではありません。

□ A、過去と現在とでは、はつきりと異なっていることがあります。やはり「科学」なのです。現代に生きる私たちは、多かれ少なかれ、科学の考え方や方法や身につけています。あまりに^{※2}荒唐無稽な論理は、誰も信用しません(もちろん、マインドコントロールされてしまうと、教祖の言うことは何でも信じてしまえます)。教団の名前に「科学」とか「真理」がついているのは、少なくとも自分たちの宗教を広めるためには、「科学的」であるという見せかけが必要だということを物語っています。□ B、現代社会は、基本的な科学の素養を身につけた人々によって動いていることが、かつてと大きく違っている点なのです。

しかし、問題があります。科学の内容があまりに日常を離れ、また難しくなっているため、自分たちには理解できないと感じられてしまうことです。専門家もわかりやすく解説してくれないし、本を読んでも難しい数式が平気で出てくる。科学が理解できる素地があるのに、科学が□ X ののです。食べられるのに、食べないまま嫌いになる「喰わず嫌い」といえるかもしれません。それは、実にもったいないことですね。せっかくおいしいものがあるのに、食べずに放っているのですから。

私は、科学への「不信」や未来への「不安」を解消するための第一歩は、科学をもっと身近にすることではないかと思っています(「不安」を訴えるだけでは、何も変わらないのです)。現在地球上に生じているさまざまな矛盾を解決するには、やはり科学の力に頼らざるを得ないからです。つまり、私たちが現在抱えている問題の本質は何で、それにはどのような手を打てば解決できるか、を順序立てて考えることが大切なのです。

科学の力が大事だといっても、^②病人に次々と注射して、さらに病気を悪化させるようなことになっては何にもなりません。まず、一つ一つの問題を、あらゆる角度から検討する必要があります。だから、「科学の専門家にまかせてしまつてはいけない」のです。市民が一人一人、自らの頭で考えて意見を述べる、それによって専門家には見えない^bソクメンが明らかになるのです。

かつて、病気を治すためと称して、本人の同意を得ず、人体実験がなされたことがあります。□ C、もはやナチスが原子爆弾を作っていないことがわかってからも、^{※3}マンハッタン計画は^cスイシンされ、科学者はそれに協力し続けました(ナチスが先に原子爆弾を作るかもしれないという理由で、マンハッタン計画が発案したのです)。専門家は、自分たちが向かっている問題がおもしろければ、その解決が何をもたらすかにはおかまいなしに、研究に熱中してしまいがちです。それにブレーキをかけるのは、科学の内容を理解し、さらにそれが現実化したときに、どのような^dジタイが引き起こされるかを判断できる知力なのです。このような専門家と市民の相互作用こそが、未来を明るくものにすることに違いありません。科学の考え方・進め方を知った市民となることが求められているのです。

おそらく、現在のままの消費構造やエネルギー使用を続けていくなら、一〇〇年もたたないうちに地球は行きづまってしまうと思われまふ。資源やエネルギーが足りなくなるとは、それらの使い過ぎで地球環境が荒廃してしまうからです。では、私たちはどのような生活へ変えていかねばならないのでしょうか。そして、^③それをどのような道筋で達成すべきなのでしょうか。

そう簡単には答えが出そうにないこの問題には、世界中の人々が知恵を出し合つて話し合わなければなりません。むろん、国内でも、地域でも、合意が得られることが必要です。そのためには、いったいどのような手だてが必要なのでしょう。私は、手持ちのデータを駆使して、未来を予測することではないかと思っています。何ができてできないか、ある道を選べばどのような結果になるか、どこまでを^eキョウウでどこからは受け入れられないか、そのような予測を世界各国のみんなが慎重に検討し、一致できることから行動する、そんな手続きが必要でしょう。ここに科学の力が生かせるのです。かつては戦争によって、強い国の論理が押しつけられてきました。そのような暴力ではなく、「科学の知」が世界の未来を決定してゆくのです。

(池内了『科学の考え方・学び方』による)

注

- ※1 トランスポーション——瞬間移動のこと。
- ※2 荒唐無稽——言動に根拠がなく、でたらめなこと。
- ※3 マンハッタン計画——第二次大戦中、米国が極秘に進めた原爆開発計画。

問1 波線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、楷書で大きくていねいに書くこと。

問2 本文中の A、C に当てはまる言葉として最も適当なものを、次のア～オのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア つまり イ さらに ウ しかし エ あるいは オ たとえば

問3 傍線部①「このような心理が『科学の時代』に広まっているのはどうしてなのか」とあるが、この問いかけに対する筆者の考える答えについての説明として、最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 現代という時代が、人々に決断を迫り、その生き方を限定しがちな時代であるからこそ、こういった時代をつくりだした現代科学の外部にあるものにふれることで、彼らの生き方に選択の幅を持たせることができる。
- イ 現代という時代が、人々に我慢を強い、変化が予測しにくい時代であるからこそ、こういった時代をつくりだした現代科学を否定するものが世間に広まることで、彼らの不安をやわらげることができる。
- ウ 現代という時代が、人々に制約をかけ、その先が見えない時代であるからこそ、こういった時代をつくりだした現代科学に収まらないものを頼ることで、彼らが現状から目を背け、おだやかな気持ちになることができる。
- エ 現代という時代が、人々に科学を理解させ、科学的思考を求めさせる時代であるからこそ、こういった時代をつくりだした現代科学にない思考に向かうことで、彼らがその要求から脱却することができる。

問4 本文中の X に入る表現として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 試練になっている イ 空疎になっている ウ 貧弱になっている エ 疎遠になっている

問5 傍線部②「病人に次々と注射して、さらに病気を悪化させるようなこと」とあるが、この表現はどのようなことについて述べられたものと考えられるか。その説明として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 私たちが科学の考え方や方法を信用しないことで、期待通りの問題解決法を得ることができていないということ。
- イ 私たちが科学の考え方や方法を無批判に用いることで、現在抱えている問題をさらに大きくしてしまうということ。
- ウ 私たちが科学の考え方や方法を信じこむことで、問題が存在していること自体が見えなくなってしまうということ。
- エ 私たちが科学の考え方や方法を理解できないことで、問題を危険な方向に向かわせてしまっているということ。

問6 傍線部③「それをどのような道筋で達成すべきなのか」とあるが、筆者はその道筋をどういうことだと考えているか。六十字以内で説明しなさい。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

康彦は、高齢者が人口のほとんどを占める過疎の田舎町苦沢で、父がやり始めた理髪店を継いで妻の恭子と生活をしている。町は衰退し続けており、康彦は理髪店は自分の代で終わらせるつもりであった。しかし、札幌の会社に勤める息子の和昌が突然理髪店を継ぐと言い出し、会社をやめて帰ってきた。その後和昌は、総務省からの出向で町の助役として働いている佐々木や若い人たちと町おこしの話し合いを重ねてきた。そのような息子の姿を見て、今後に不安を覚える康彦は、幼なじみの谷口にことあるごとに相談をし、谷口も相談にのっていた。以下は、そのような状況で行われた「町おこし講演会」での場面である。

基調講演が済むとディスカッションに入り、活発な意見交換がなされた。和昌も挙手して発言した。

「ぼくはカフェが軌道に乗ったら、※1 コミュニティFMを開局したいという夢を持っているのですが、やはり一番の問題は機材等にかかる費用と、いかにして※2 採算ベースに乗せるかだと思います。苦沢の場合、広告はほとんど期待できず、スタッフも当面はボランティアということになるんですけど、FM局が出来たら、地域の広報機能とか、災害時の情報提供に使える利点もあるわけで、町からどの程度のバックアップが得られるのか、そういう点を、大雑把でもいいですから教えてもらえませんか」

康彦は授業参観を思い出した。息子は昔からよく発言する子供だった。懐かしさを覚えつつ、変わらないなあとため息も出た。だいたい飽きっぽい息子なのだ。

和昌の質問には司会役の佐々木が答え、それについても活発な質疑応答があり、会は賑やかに進んでいった。

暇だから見物に来た年寄りたちも、青年団のやる気には目を細めている。彼らには若者がこの町にとどまってくれることが、一番の幸福なのだろう。

「それではお父さん世代の方々のご意見も伺いたいのですが、どなたかございませんか」

佐々木が会場を見回す。康彦と目が合った。

「向田さん、これまで聞いていていかがですか？」

A を向けられ、一瞬言葉に詰まった。ここで会をしらせさせないのが大人のマナーだろう。張り切っている若者たちに A を差すことはない。

しかし、やっぱり、ひとこと言いたくなった。自分たちだってこの三十年間、ただ手をこまねいていたわけではない。町おこし事業は何度も試みてきた。それでも町民は減り続け、財政は ※3 逼迫の度を深めてきたのだ。

「佐々木さんにひとつ聞きたいんだけど、これまで財政破綻した過疎地で、町おこしに成功した例はあるんだべか？」

康彦が立ち上がって質問する。① みな視線が集まった。

「町おこしの成功例はたくさんあります。動物園を大ヒットさせた旭山市がそうですし、地元商工会でサッカーチームを創設し、J2まで昇格させた市もあります。ただ、苦沢のように財政破綻をした町となると、残念ながらもまだ成功例はありません」

佐々木が正直に言った。

「あんた、本当にカフェだのラジオ局だので、町が甦ると思ってるべか？」

「甦るかどうかはわかりません。もし炭鉱があった頃の活気を期待なされるなら、それは無理です。町の ※4 基幹産業が丸ごと消えたわけですから。しかし、今より元気になるかどうかについては、元気になると信じています」

ぶしつけな問いかけにも、佐々木は穏やかな表情を崩さない。

「じゃあ聞くが、あんた方、この町に住みたいかい」

「うーん、それは答えるのがむずかしいですね。だいたいわたしの故郷は長野ですから」

佐々木が B する。

「一般論として聞いているのさ。あんたら、過疎の町を可能性があるとか言ってやたら持ち上げるが、自分は住む気はあるべか？ それともねえべか？」

「お父さん」

横で恭子がささやき、シャツを引っ張った。② 康彦はそれを振り払い、話を続けた。

「みんなが盛り上がっているところでこういうことを言うのは気が引けるけど、わたしらの世代はもう現実をいやってほど見てきた。税金を投入して、※5 第三セクターとやらを作って、工場を誘致したり、あれこれ事業を興してきた。だども全部ダメだったべ。あれだけ金を使ってダメだったもんが、若い人たちの熱意だけでなんとかなるとは到底思えね。こつたらこと言うと、町民みんなから叱られると思うけど、X 苦沢は沈みかけの船だべ。沈む船なら、親としては子供を逃がしてやりたい」

「おい、向田さん、それは言い過ぎっしょ」

「それはちよつとひどいんでねえのか」

ほかの参加者から抗議の声が飛んだ。

「すんません。怒るのは当然だと思います。でも、事実なんだからしょうがねえ。わたしが言いたいのは、東京の人たちが、自分たちはこの先乗船するつもりもないのに、地元の若者たちをおだてて、船にとどめようというのは、なんか無責任じゃねえのかって、そういうことを思うわけです」

康彦の声が上ずる。話しているうちに気持ちが高ぶってきた。

「じゃあ、どうすればいいんですか？」

佐々木が冷静に聞いた。

「腹案なんかねえ。ねえけど、あんたらの町おこしには素直に賛成できんですよ。これは人で言うなら終末医療みたいなもんだべ。延命処置を施すのか、天にゆだねるのか。わたしは天にゆだねるっていうのも、選択肢としてあってもいいんじゃないのかって、そう思うわけです」

会場に不穏な空気が流れた。③ 前の席から振り返り、不愉快そうな目を向ける若者が何人かいた。

「ええと、それでは今の向田さんの発言に対して、何かご意見はありませんか」佐々木が聞く。

「沈む船かどうか、やってみねえとわからねえべ」

そのとき、和昌が低い声で唸るように言った。静まり返っていたので、会場中に届いた。

「やりもしねえで、沈むってどうして言える」

「もうやったべさ。これまで何度も。それでもだめだった」康彦が応じる。

「親父たちはやってだめだったかもしれねえけど、おれたちはまだやってねえ」

「おまえたちはそう言うが——」

「親父たちがどう思おうが、おれたちのやる権利までは奪うなよ」

「そうだ、そうだ。カズ君のおじさんは黙っててくれ。おれたちは苦沢が好きだから、たとえ沈みかけの船だとしても、指くわえて見て見るわけにはいかねえ。そうだろう」

「おれたちだって現実が厳しいことぐらいわかっているべや。でも何かやりたいのさ。おじさんたちに迷惑はかけねえから、好きにやらせてくれてもいいんでないかい」

若者たちが反論すると、しばしの沈黙の後、谷口が拍手をした。「いいぞ、いいぞ、その調子だ。年寄りに負けるな」野次を飛ばす。

恭子も隣で拍手をした。やがてそれは会場中に広がり、康彦は黙らざるを得なかった。「といてよ、といてよ」ということでよろしいでしょうか」と佐々木。会場が笑いに包まれた。彼には願ってもない展開だろう。

康彦は座席に腰を下ろし、大きくため息をついた。恭子に向かって負け惜しみでふんと鼻を鳴らす。一方で、どこか安堵する気持ちもあった。これでよかったのかもしれない。自分が恥をかき、和昌たちの株が上がった。言ってしまうのがないことを、自分は言ったのだ。見ない振りをして保たれる平和が世の中にはたくさんある。

④ 野次を飛ばした谷口が後ろの席に来て、ポンと肩を叩いた。振り返ると、何も言わずに笑っていた。
(奥田英朗『向田理髪店』による)

注 ※1 コミュニティFM——放送エリアを市町村に限定したラジオ局のこと。

※2 採算ベースに乗せる——利益が出る状態にすること。

※3 逼迫——余裕がなくなること。

※4 基幹産業——地域の基礎をなす産業。

※5 第三セクター——役所と民間企業が共同でお金を出し合って事業を行うもの。

問1 本文中のAには、同じ漢字一文字が入る。その漢字を答えなさい。

問2 本文中のBに入る言葉として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 失笑 イ 爆笑 ウ 冷笑 エ 苦笑

問3 二重傍線部X「苦沢は沈みかけの船だべ」に使われている表現技法として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 直喩 イ 擬人法 ウ 隠喩 エ 倒置法

問4 傍線部①「みな視線が集まった」とあるが、このときの説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 会場にいるほとんどの人が、若者が町で活動をしていこうとしていることを好ましく思っていたのに、町おこしの先行きに疑問があるような質問を康彦が始めたことに誰もが注意を向けている。

イ 活発な質疑応答がありにぎわっていたとはいえ、みな冷静にすわって話し合いをしていたのに、今まで無口だった康彦がいきなり立って一方的に発言を始めたことに誰もが驚かされている。

ウ 若者たちが町に帰ってきて活動する姿を見て幸せを感じていた年寄りたちを無視して、康彦が自分の意見を押し通すかたちで年寄りたちの幸福を奪おうとしていることに腹を立てている。

エ 年寄りや若者を含めいろんな年代が集い、対応が難しいとはいえ、このような場では各年代に配慮した発言が必要なのに、自分の年代の意見ばかりを言う康彦に対し冷めた目を向けている。

問5 傍線部②「康彦はそれを振り払い、話を続けた」とあるが、「康彦」の振る舞いはどのような思いからか。それを説明した次の文のIに当てはまる表現を三字で、IIに当てはまる表現を八字で、それぞれ本文中より抜き出して、文を完成させなさい。

東京の人たちが、この先自分たちはIもないのに、地元の若者たちに町おこしをたきつけているが、これまでこの町で過ごしてきた数々の失敗を見てきたため、IIだけではどうにもならないことを伝えたいという思い。

問6 傍線部③「前の席から振り返り、不愉快そうな目を向ける若者が何人かいた」とあるが、ここで「若者たち」は、どのような意見に対して、どういう思いを抱いているか。九十文字以内で答えなさい。

問7 傍線部④「野次を飛ばした谷口が後ろの席に来て、ポンと肩を叩いた」とあるが、このときの谷口の説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 再び町おこしが失敗したときのことを心配する康彦の気持ちは何度も聞いており、自分にいくら言ってもどうしようもないことだと無言で康彦に伝えている。

イ 再び町おこしが失敗したときのことを心配する康彦の気持ちは理解しながらも、反対するものもこのくらいにしておこうじゃないかと無言で康彦に伝えている。

ウ 再び町おこしが失敗したときのことを心配する康彦の気持ちは自分には理解できないもので、反発されるべくして反発されのだと無言で康彦に伝えている。

エ 再び町おこしが失敗したときのことを心配する康彦の気持ちは自分にも通じる部分があるが、失敗したのは自分たちの責任なのだとも無言で康彦に伝えている。

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子どものころ、新聞や本など、文字の書いてあるものを踏むと叱られた。

「本は大事にしなさい」

と、教えられて育った。服や靴をねだると「そんな贅沢はだめ」と、Aはねつけられることが多かったけれど、本だけは喜んで買ってくれた。

小学館の『少年少女世界の名作文学』という全集を定期購読することになったのは小学三年の時。全五十巻で、毎月一巻、

寄付が決まった時、久しぶりに手にとってパラパラとめくってみた。あちこちのページに、フランスパンの皮が挟まって、シミもある。クツペの皮とバターのシミだ。
『アンクル・トムの小屋』を見つけて、開いてみた。所々、ページが折れ、少し破れているのを見て、懐かしさと胸の疼きを覚えた。

柱に本を叩きつけたあの日、私は^③ 本当の読書というものに触れたのかもしれない。けれど、大人になってからの私は、さほど本を読まなかった。人生の中で、濃密に読書したのは小学校の頃だけだ。今も私は、あの頃読んだ物語の記憶をたよりに生きている気がする。

(森下典子『こいしいたべもの』による)

問1 波線部 a s d のカタカナを漢字に直し、漢字は読みを平仮名で答えなさい。ただし、漢字は楷書で大きくていねいに書くこと。

問2 二重波線部 A 「はねつけられる」、B 「佳境にさしかかる」の本文中での意味として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---|-------------|---|-------------|
| A | | B | |
| ア | 手厳しく断られる | ア | 退屈になってくる |
| イ | 大声で叱られる | イ | 終わりに近づいてくる |
| ウ | 穏やかにたしなめられる | ウ | 意外な展開を始める |
| エ | 上手く言いくるめられる | エ | 非常に面白くなってくる |

問3 波線部①「大急ぎで縁側に駆け戻った」とあるが、読書に夢中になる「私」にとって「縁側」とはどのような場所だったのか。それを比喩的に表現した箇所を、本文中から五字で抜き出して答えなさい。

問4 本文中の [] に当てはまる表現を十字以内で本文中から抜き出して答えなさい。

問5 波線部②「抑えられない感情が涙になってポロポロこぼれた」とあるが、この時の「私」を説明した次の文の [I] に当てはまる言葉を五字以内で本文中から抜き出し、[II] に当てはまる表現を十五字以内で考えて、文を完成させなさい。

[I] への衝撃と怒りに駆られて [II] ことへの罪悪感に心をさいなまれ、破損した本に対して申し訳ない気持ちでいっぱいになっている。

問6 波線部③「本当の読書というもの」とあるが、このことについて話し合った以下の生徒の会話の「X」「Y」に当てはまる言葉を、後のX、Yのあくのうちからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

生徒A——僕も小学校の低学年の頃、学校の図書室に通って読書するのが大好きだったなあ。でも年齢が上がるとともに、あまり読まなくなってしまうんだよね。

生徒B——主人公の「私」も小学校の頃、おやつを食べながら読書にふけるのが楽しみだったんだよね。その頃の「私」は世界の名作に触れる中で、「X」を養っていったんだと思うな。

生徒C——でも『アンクル・トムの小屋』だけは違った。それが「本当の読書」に関係しているんじゃないかな。

生徒D——「私」は大人になってから久しぶりに『アンクル・トムの小屋』を見て「懐かしさと胸の疼き」を感じている。そして「今も私は、あの頃読んだ物語の記憶をたよりに生きている気がする」と述べていることから、「本当の読書」とは「Y」のような読書ではないのかなと思うよ。

X ア 思考力や向上心 イ 想像力や好奇心 ウ 生活力や自立心 エ 実行力や道徳心
Y ア 読者が期待したり予想したりする展開のものではなく、未知の体験と驚きをもたらし、その人生を全く逆の方向に変えてしまう

イ 一般的な本が持っているおもしろさではなく、専門書ならではの知識や学力をもたらし、今後の学業に大きく貢献してくれる

ウ 読者にとって好ましい感情だけではなく、つらく苦々しい感情や激しい心の揺れ動きをもたらし、その生涯にわたって影響を残す

エ 最近の出来事や話題だけではなく、歴史的な出来事についての知識をもたらし、その後の考え方や感じ方に深みを与えてくれる